入試雑感

本年度の入試問題について、たくさんの問題に直接触れている編集委員が率直な感想を述べます。
（**太字の出典**は、本問題集に採録）

古文

この数年の傾向は変わらず、以前は大流行していた擬古文がほとんど姿を消し、『**土佐日記**』（5北海道大）や『平家物語』（岐阜大）、『紫式部日記』（香川大）など、受験生が一度は教科書などで読んでいるであろう、よく知られた文章からの出題が目立った。また、『**一休ばなし**』（16東北大）をはじめとして、『**宇治拾遺物語**』（14九州大）、『**古本説話集**』（10佐賀大）など、説話や仮名草子、軍記物といった、比較的読み易い作品からの出題も多かった。中でも特筆すべきは、12東京都立大『**十訓抄**』と岡山大『宇治拾遺物語』は同じエピソードを扱った部分から、また熊本大および11広島大は、それぞれ『**義経記**』の同一箇所から出題されていたことであり、偶然とはいえ驚かされた。

たとえ課された文章は平易であっても、問題も易しいというわけではない。深い理解力、的確な記述力が求められるという出題の傾向は変わらず、その意味では易化したというわけではない。『**讃岐典侍日記**』（6東京大）で和歌の大意を説明するよう求められたり、『**とはずがたり**』（8京都大）では和歌に関係する部分を「言葉を補いつつ現代語訳せよ」と指定されたりし、単に現代語訳ができたら終わりではなく、歌の修辞技巧を踏まえて文意をよく理解し、問われていることに対して的確に答えなければならない。中でも『**鴉鷺物語**』（18大阪大）は、和歌の理解、掛詞や象徴的表現など、きわめて難解な文章で、受験生は難渋したことであろう。**問6**にいたっては「読者に与える表現効果を答えさせる」という、あたかも現代文のような設問であり、実際に受験した生徒からは「どう答えたらいいか迷った」との声も聞こえた。

高校のカリキュラムが改訂され、共通テストの配点も変わるようである。古典軽視の風潮を感じるが、大学が受験生に求める力に変化があるとも思われない。古典の学習にかける時間が減っているとしても、短くなった時間に知識だけを詰め込んで終わりにするのではなく、その作品の世界観、作品を生んだ時代の背景まで含めて古典作品を深く理解し、古典の面白さに触れてもらいたいと切に願う。

漢文

本文の分量は一部の大学を除き、一ページ程度に収まっている。内容の易化は落ち着きをみせた。昨年に続き、二つの出典『**後漢書・五雑組**』（22九州大）からの本文を使った出題や、『韓非子』からの本文と『老子』からの引用を比較して考えさせる設問（福島大）など、複数の文章を並べた問題も出ている。

出題は句法・用法が手がかりとなるものが多い。出題箇所になくても、解答するには句法の知識が必要な場合もある。再読文字は必須。反語や使役だけでなく、受身、仮定、限定、比較、選択、比況、抑揚など幅広く出題され、書き下しや口語訳とともに「豈（あに）」「如（もシ・ごとシ・しク）」などの読みもよく問われている。ほかに「自（より）」「雖（いへども）」「所以（ゆゑん）」「蓋（けだし）」などの読みも頻出。難関大には句法に頼らず文脈から考える問題もあり、漢文を読み慣れておくことが必要。信州大では時間を表す語が多用された理由を問う、思考力を試す新傾向の設問があった。

記述の量は、名古屋大で一五〇字の記述があり、ほかにも七〇～八〇字前後で記述させる大学も多く、まとめる力が試される。また、傍線部の説明を求める問題であっても本文全体を踏まえて書くべき場合もあり、どこまでをまとめるのかを判断する必要がある。対句的な表現にも注目すること。もちろん、本文だけでなくリード文や注は解答のヒントになるので必ず読み、理解の助けとしたい。特に中国独特の文化が関わる問題は、リード文や注をしっかり読む必要がある。

ジャンルについて、随筆・評論にあたるものは『**送薛存義之任序**』（23北海道大）や『**諫論**』（26東北大）、『**書林揚觶**』（27東京大）などが出題された。日本漢文は『柳橋詩話』（上智大）などが出ている。諸子百家など「思想」にあたる文章は、前出の『韓非子』（福島大）や、『**淮南子**』（19香川大）など複数出題された。詩は『**白氏文集**』（24滋賀大）から出ているが、今年も出題は少なかった。ただ押韻や対句、詩の構成など、詩の基本事項は解釈のヒントともなるので確認しておくこと。「歴史」は前出の『**後漢書**』（22九州大）、『史記』（神戸大・佐賀大）などから出題された。説話的文章では前出の『斉諧記』（信州大）などが出題され、言行録では『貞観政要』（広島大）が出題された。全体として、物語的なものより評論、思想など論理的文章が多いことが今年の傾向であった。